

キクヒラ 菊平 加賀の刀工。加州住源菊平と切る。寛文頃。

キクラマチ 木倉町 金澤の町名。本町の一つで、元祿九年の金澤町肝煎裁許附に木倉町と載せられ、もと藩の材木蔵があつた爲の稱である。後この町の西半を大工の邸地に賜はり、出大工町と稱したが今又廢した。

キクラヤシキマチ 木蔵屋敷町 金澤の舊町名で、元祿九年の金澤町肝煎裁許附枝町の次に記されてゐる。昔は此の地に材木蔵があつた爲か、又はその藏跡を地子地として家屋を建てた爲の稱であらう。

キクラヤチヨウエモン 木倉屋長右衛門 金澤の町人。家傳によれば、四代長右衛門初め無商賈であつたが、田井天滿宮の神託に因り、罌附油を製し、梅が香と名づけて發賣した。後漸く繁榮し、天和元年以降藩用を命ぜられ、享保六年川南町に轉じ、十二年五代長右衛門に業を譲つて、元文元年九月十五日歿した。爾後歴世相繼ぎ、明治十四年に及んでその地を去つた。今の木倉屋は別家が本家の舊屋を買附けたものである。

キクリユウ 規矩流 澁川有又の研究教授した算法をいふ。

ギケイキ 義經記 (一) 著作年代—義經記は源義經が北國を経て奥羽に逃竄したことを書いてゐる點に於いて注意すべき物語本である。この書の作者も著作年代も不明であるが、通説に従へば、その文體から判断して室町中期の作とせられる。しかし、それではこれから取材した謡曲との距離が餘り近接するから、その年代を室町初期若しくは吉野朝に引上げたい。又その記する所義經の幼年時代

と没落時代に詳かで、史上に活躍した時代を描寫しなかつたのは、之を平家物語に譲つたのであるとする説がある。

(二) 判官北國落—義經記に叙する判官北國落の條の大意はかうだ。義經が越前三の口に入るや、當國の住人敦賀兵衛は、加賀の住人井上左衛門と共に關を設け、以て之を捕へんとしたが、辨慶の機智によつて難を脱することを得た。一行はそれから平泉寺に詣で、加賀の篠原に入り、安宅を経て根上、松に着き、岩本の十一面觀音に通夜し、白山及び劔の權現に賽し、次いで林六郎光明の庭前を過ぎ、宮樫介の居館に近づいた。宮樫介は固より當國の豪族であるから、鎌倉幕府の命を受けたのではないが、切かに義經等に對して警戒するとの説があつた。辨慶乃ち一行と袂を分かち、獨宮樫介の館に至つて動靜を窺うたところ、此の日桃花の節に當つたので、上下蹴鞠・小弓・關刺・管絃の遊戯を試み、酒宴正に閑なる頃であつた。辨慶は強ひて館に入り、東大寺再建の爲と稱して勸進したに、宮樫介之に應じて加賀の上品五十疋を奉加し、女房以下結縁を乞ふもの百五十人に及んだ。辨慶は之を謝し、その寄進の物は來月中旬越後よりの歸途受納せんことを約して去つた。是より辨慶は義經を迫ひ、宮腰で百方求めたが得ず、大野に至つて初めて相會した。この夜一行こゝに宿泊し、翌日竹の橋に至り、また俱利伽羅を越えて馳込谷に平氏の陣亡者を弔し、越中松永の八幡宮を過ぎ、如意渡に着した。然るに渡守平權頭は一行中に義經あるを怪しんで、容易く乗船を許さなかつたから、辨慶は偽つて、この渡あるが爲に履行旅の運糧を來

すの憂があると怒り、義經を砂上に引倒し、扇を執つて打擲した。權頭の疑惑乃ち水釋し、一行は遂に河を渉ることを得た。といふのである。

(三) 義經記と地理—義經記は一の釋史であるから、内容の眞偽は固より批判するを要せぬ。唯書中に記する所の地理に至つては、本書著作當時の實際を記したものであるから、好箇の資料として尊重すべきものであるとする説がある。しかし、これも餘り賛成ができぬ。試に之を言はう。義經記に據れば、義經は先づ夫人の生家なる一條今出川の久我邸を出で、栗田口・松坂から逢坂を過ぎ、大津に至つて一宿し、次いで湖上を渡り海津に上陸した。是は尋常の旅程である。それから近江・越前二國の境界愛登山を超えて三ノ口に達した。三ノ口は道の口である。こゝに一人の男來り、一行が三ノ口の關門を通過せんとするの頗る冒險なるべきを告げ、更に前途の地理に關して詳説した。

『此山の峠より東へ向うて、のうみ越にかゝりて、ひうちがじやうに出で、越前のこゝにかゝりて、へいせんじを拜み給ひ、くま坂へ出で、すがうの宮をよそに見て、かな津の上野へ出で、しのはらのあたかのわたりをさせ給ひて、ねあがりの松をながめて、白山の權現をらしい給ひ、かゝの國宮のこしに出で、大のゝわたりし給ひて、あをがさきのはしを越えて、たけのくりから山をへて、くろさかくちのふもとを、こいしやうにかゝりて云々。』

ならば大なる誤謬である。先づ越前から熊坂を經る時は始めて加賀路に入り、そのすがうの宮といふものは皆生石部神社であるが、金津の上野は越前であるから逆行することになる。次に安宅を経て根上、松に至る。此の地は安宅の東北に當り、往時老松のあつた所と見える。義經記の後文には『是は白山の權現に法施を手向くる所なり。』と記されてゐる。是から大野湊神社の所在宮、腰を過ぎ、大野川を渡つてあをが崎に達する。あをが崎は青崎といふは竹、橋、俱利伽羅の誤脱であらうが、宮、腰、大野、栗崎、竹、橋の順路は、何れの時代の北陸道でもなかつた。

(四) 錯誤の原因—然らば義經記はいかにして此の如き地理的錯誤を致したかといふに、言ふまでもなく、著者は實地の智識を有せず、單に源平盛衰記に記載せられた、壽永二年平軍が源義仲を拒く爲、北陸道を下つた時の記事に據り、しかも正當に解することができなかつたからであらう。蓋し平軍の進んで野、市附近に至るや、兵を分かつて二隊とし、維盛軍は森本・大庭・崎田・井家・津幡・竹橋を經て俱利伽羅に向かうた。これは北陸道の本線である。而して通盛軍は、宮、腰、徳藏、大野、青崎、室尾、日角見、白生から志雄路に向かうた。これは能登街道である。然るに義經記の著者が、宮、腰、大野、青崎から竹、橋、俱利伽羅に連絡する如く考へたのは、この二者を混同したものであらう。されば著者の地理智識は、全く机上で製造せられたもので、室町時代に於ける行旅の道程を示す資料にはならない。